里見八犬傳

第二輯

巻五

へ13
709
10

南總里見八犬傳第二輯巻之五

東都 曲亭主人編次

第十九回 亀篠奸計糠助を賺す 番作遠謀孤児を托す

却説荘客糠助は。懇に信乃を副けたる犬を蟇六が背門に追入れて討せしるは齟齬ひたく。犬を失ひしのみなるを外餘これが身に係らん歟とおそれて安く逃かへりて妻聟に縁由を告めし。庄官は主人なれば向ひ在るを見と答へもとのみあへども。奥の間なる処に隠れて衣引被て臥てありけり。起て而も心安からでいたりにいふと思ふに稍〻果して蟇六が小厮なれば。糠助ねし宿所にあるや我内政の嗚せまほしとていそぎ來らぬ。あへしは左までと欺く拘らぬ。使は擲の歯を挽く如く再び三たび及びしは。今は脱るゝ路もなし。ここに内政よりかしとろのべそのことあるに

と罵れども只ひたすらに出かねる女房は辣がるまゝ小厮使に引立させて已ことを得ざりき。
使ともに蟇六が宿所へ担ひ去り當下亀篠は子舎に糠助を呼入らして生平
にはあらぬ莞爾にほとり近く招よせてまづその安否を訊しく糠助は些かから
ぬくいと著えし顔の色稍浅葱まで復しける且しく亀篠は傍なる人を
遠ざけて貌を改め声を低うし儀頃にそなたを招くこと定めてあやしく覚ゆるならん
いふをまつべし稚家を副て番作が猘犬を村長の宅地へ追入れ人を食せんと謀りしかど
そのこと信乃が棒を曳背門より逃て遅りしを小厮等にみえしよしは陳ざるに
彝なるべし加旃彼犬はこの子舎へ走り入りゝ是らは只と敗れてある一通の書状を
牛して推出して見著てかる孫衷を志るゝにこの鎌倉の成氏朝臣許我へ落
させ給ひし後この地の陣代大石ぬしも両管領に従ひて身は鎌倉にをはしませば
兵粮の事あるごとに良人に命せ給ふとてあるさのよく知るところ改めて

いふにおよぶ狢ども然度は鎌倉より許我の城攻あるべしとて兵粮催促せらる。
管領家の御教書に陣代の下知状を添ありければ乍脚到著せり。なほさに
よつてこそ良人は二の子舎の塵を掃ひ御書拝見の折もより件の犬が走り入りて四
足にかけてかくの如くなればとて踊裂て脱をふべくめぐるに犬はすでに遂に瘡つけて
途方なく驚き一旦の犬の狢は主の家にやかへりつらん御教書扳扉の下突破りて外面へ逃ぞろ
数个所の疵を負せしかども猛りくるひしこそ御教書破却は謀反に等し畜
生法度をそむくとのみもその犯しは罪科脱るゝいはれやは犬を追入させる
そのこと信乃はいかなるべき百遍大赦の時にはあらふも助るかたなき命なるべし固
より先朝あつての両狄番作は手ずから中ならけぬ子に分附して
事をまぎらさんとす何者の怒あるそ身の滅亡を見んことをよくよくこの
人は肝膽くく長がなかさんとする事ぞ人憎むこと怒ぬれば糠助は駭き怕れて

冷汗を流すのみ。今又よりの呼び出しなれば且つ頭を擡げ越度のなくて
ものの命ばかりを脱るべうとゆるぎ件の犬のうみ就て長こころを立て追
ひてゆくゆくと然とて如此くと陳じ難く免さるべきあら拯べ大慈大悲の
仰ぐのみ願はくは今政摂撕く。吾倩ずらはば救ひ給へ助けの人といふ声も枯野の
虫の鳴音よりも心細げなる口説なり。亀篠代く嘆息し人の頭を俯むけ
よりこころ憂たのみ思ひを反れも公の道のくを立て郤る。憎むも人の私
ゆく人を恵めば職を欽職を立べ邪怪なる仍り綽一下もとぢみをはるべ
そのこふさぐるの上番作親子を特と捕捕鎌倉へ牽べ立ども可愛や
親の偏僻まく言一言もりけさせぬ信乃は現在こふが俤る上憎しと思へど
番作は蔓延む身なり。そ然一朝は罪なはし快愉とさるとれ人こるあこそなれ
あふぎいと痛く悲しくて怒るる夫の決ふ携上法々勧解くけん一日の追捕

の沙汰をとぶめうとそだろうとみくくその罪ばかり賢まれ脱れ難しのぐ救人方も
ろうと人ちよね胃を苦しめいと浅ろるあ女子の智恵まれ及ぬるばかりまく。
念じく僅ふ便り然ろう。番作が秘蔵せる。村雨といふ一刀は持氏朝臣のもん佩刀
まで春王君（壌せる）源家数代の重宝なれば管領家もよく知食るまの不と
思召よりも豫くそのゆゑあり。今彼宝刀を帰食へ献上件の罪科ばかり勧解まるべ。
そのこのうえ恐るべく番作親子も赦さるべそれ我を折て墓六どのみ
ば身ばかり雖ら又この願ばかり鎌倉へ上べ死。かくやうのこふ絨をこのほ
薛心は疑ひく自滅をとぶせんまべ。そのこも兄期ばかり。さ少てのこの絨
告んとくかくは竊は拒れーと真ーなふ説示せ糠助魂ばかりまくのろもど
太刀自を吻れ言ふけるの上ひぬ飲食まの他人集上憂苦まの親族取人世
常言はと上あるる年まは底を摺せ人と呼るもどは行人ろまの危

山崎堂蔵

窮を救ん君をしも身をしら糠助かくてはべらじ。舌の根のあらん限り。富妻那と
申さんが辨をつくし犬塚ぬしのこゝろを和げ。縡よくとゝのへはべらん。そのときには我常
一番に僕を被させ給へ。善ハ急げといふことあり。とて退らんと立あがれバ。亀篠
霎時と引とゞめ。いかにかくてハあらん孫ども成もすなるにはあらねども一日ならず。長舌饒舌
時ならで穏しく夜あけて後悔さするといへバ頻にうち点頭其処ハ勿論女才覚。
こゝろ得てはと応もあへず隔亮を逆に。ふりかへて遠しく引開んとして推外し倒さし
かゝる人々に近づかず。外面へ身を横にして出しハ亀篠吐嗟と身を起して
倒るゝ隔亮を受とゞめさせても亀篠の人々など嗟死るがら立著ては次の間に
竊聞せる。蟇六ハ枝戸を開きて夫婦目と目を注して。覚ず笑て亀篠欣
こゝろ使ひとよくしのばすや。皆よにまして首尾よしといふ声に目やさましけん甚手
のあまりに茶を挽つけて眠臥に居る額蔵が又挽いだる臼の音に驚されつゝある

夫婦ハ夕立雨の雷に。旅人のそゞろ心地して。密語あへども共に。納戸の内へ隠れ
けれバ。糠助ハ踏む足更に地につかず。慌忙きそゞろに犬塚が宿所に赴き
件の縡のはじめより亀篠がいひつる趣を。あからさまに告て。童の智恵に縋り
ていと殊くも支柝慧出せし。僕が大人気なしとて叱りなさば勸解もせめ只勸解
なほとく免させ給へ。御教書の破損ありしからば彼鄙語に。地獄にも
知る人あれといふハ寔にこのことなるべく。腹きる程とのことなりし。ちん身が頼れ前
の菩薩心腸可愛しといふ誠が。則親之聚憂苦まさりて。吾儕もよ死日にあらし
あり我がよき事ぞよ。宝ハ身のさし替なり。村長になれば鼻さきなりとも何をか
聊も恥よ。わるきを姉に降るハ長順え。おん身が子として。何事も子さへを
見えすく。この一紙をハ折あへずけり引あへと申合し。辨を盡して勸まし一番
佐驚ぐ気色なく。つくと笑果て御教書のことまでつるかや。驚きもしたりな理なきえ。

和殿その一通を認めかくいふやと問はるに糠助既に擬定いるゐ人角ふくを
ちくまて如く五侍八固よりは主筆なり。御教書とそ作のつるぐとといへば番代冷
笑ひさまたげよ人のかくはさるくまく。測はるこれのぞ笑の中に刃を隠きに
今戦國の習俗に親族ととく心放さず。臍を噬の悔あるん年来の讐敵
のあるに既ちつる妨妨夫が猛る弟をいと惜く侄を愛さるふさろること。
又その事実なく。村雨の刀を出し。罪なき贖人と謀るとも赦さるべ益の
所為に大刀ざふ出さん差るーとに何人が定めーぞ。管領家の沙汰ぞい
下よりは上を討るん。かはるべそれも遇そうとに。果しく縛る如く。ゆるさるるも
あぶ鎌倉へ牽まく後は大刀を進らるとも遅るはあるまじ。和殿のうへは
いろだるは心ろーくそくどの女ーく子ゆるふ驕胥しく不覚をとるふ武士の
瑕疵ろりその後はん後はんとの糠助勝ちち敵をいるくそまを

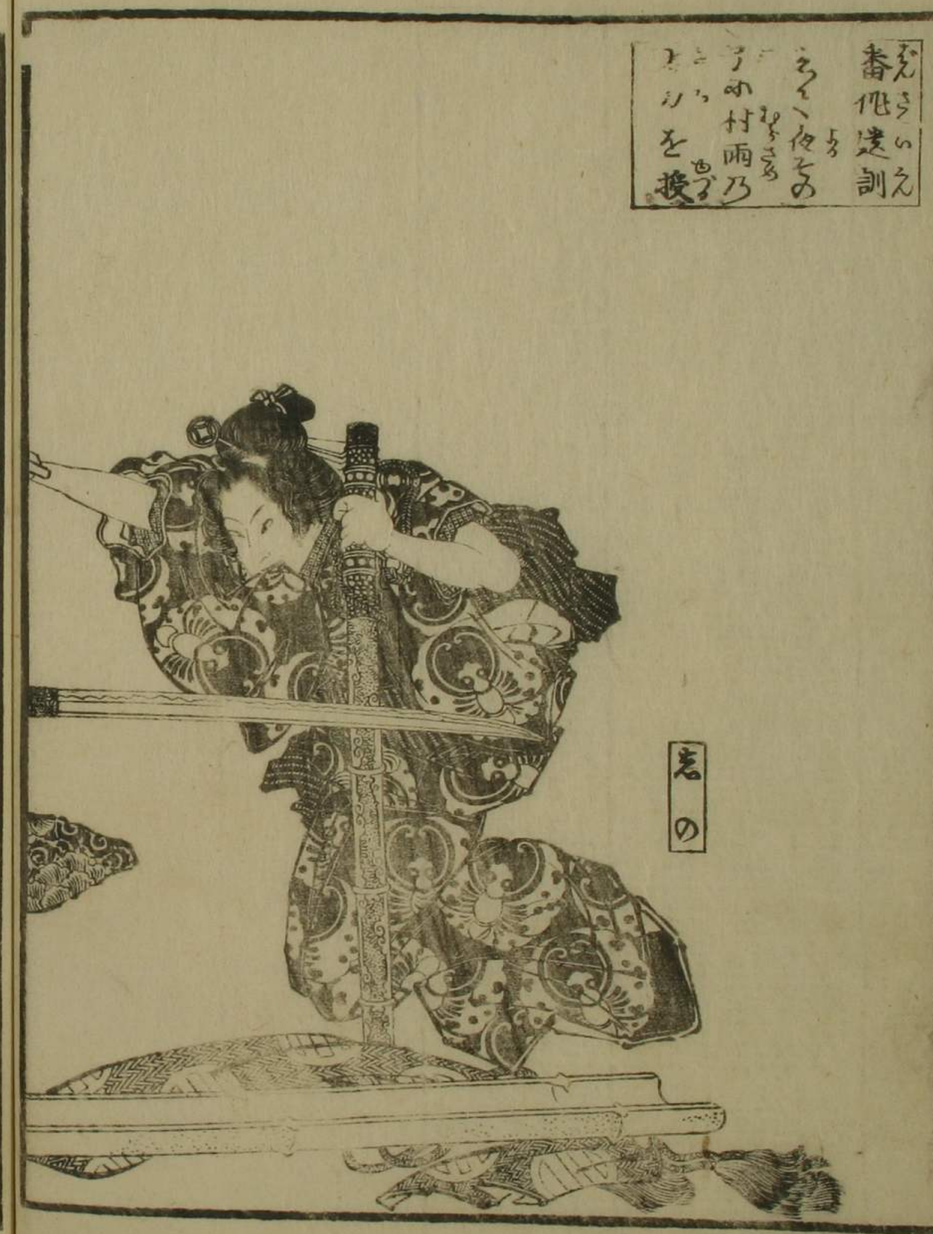
偏僻あり。疑はくけの既過さべ。後悔其外ふ立ぐに。親子とのべ三人が命只
一口の大刀を出して。救ひのるふべ半晌さるとも速ぐがよ。縛縄の恥ふ妻
子を泣し。彼此人は指ぐさるに辛して助まるに可惜武士ふ疵が著ろひ久に
見應とのの一声を発るでふ宿所へ還ふるにぞ堂合しく拝むはえどやえつは
とろに口説繰果べうとあぶざるふ。番代ととくはてあまに。ろぶ子一人がうへるべ
八創ふせらくとも人の異見を何でふきくべぐに。かくても暁らぬ和殿が周章ふ今
思えさるは由るるるよく考て返答せん。日くるにて再び来ぬ人といはは糠助外を見
入り。背門の柳ふ緯日が落るふ今ぞや暮るふ猶もに夜食過しく又来ぬん。あ
織る人ふ人を謀るく刃を弱ぐるくねるるまるう。あまりふ人を疑ふて糠助さ入る
殺しるるる且退ら人と先腰ぐ立て女ーく刃を起を足の痿痺を捺ぬ人ぞ。猿歩
降る沓脱の人の草履を先足穿ぐ先足ふ穿ぬ洗走馬憂ふ重荷に久凍解よ。

趨跪曳々かへり去。三月の天日冴々。秩父おろしの父風ふ衣ぬさせんと親をぬふ。
信乃ハ一室ふ習の机を安ぐく片つけ。花田色ある太織の臀中羽織背ともに推
ゆるぐく父ぐ肩ふ掛出居のくふ掛て置行燈ふさや点を灯の八隅隈なく照
さゆとも。庚よりも明き夕月夜まぐ息絶ぬ子四郎ぬちびつくなげふさ〻覗き両
戸一枚繰ひけく父がほとりふ火桶をよせ。風がかつまく猛ふ寒〻。日ぶ長々ぬ
さゆ〻過せ〻夜食の雑炊ヨヌくもあるよど。拍子うるりゆふどゆと。問ぞ番仕
ぬ掉刀を動ゆさぐをるゆぬ三さびのかふ行ぬ久食べぬ霄越の雑炊ハせん
さびのるぬめ。餘ぬまあふバ復さべよ。冷るゆバるゆ温めよ。といひく火桶ゆよせて
さゆ埋火を掻起せびいるあまりとてハひろど與四郎ゆも與〻と拍食べくも
いふどよ〻るや犬を救んとく。かる難義ゆ及ぶと皆是吾倩ぬ不ゆるえと悔く
絶ゆきとるゆぐく。今糠助ぬひつるよ〻を大人の甚も彼れるく。涙ふ伏めてゆひる。

御教書のゆ實ゆふ禍既ゆ遠ゆ固よ大人ハちゆめよ。知己ゆるゆゆ
孫ゆ。ちふく遍もいひとぬく。吾刃ゆるぬ〻ゆ罪ゆるゆ。ゆ倫ゆり。
光期究めくをるゆぐ。ゆん行歩ゆ不自由ゆく。病を生平なるゆぐ大人ふ豈
より誰ゆ仕ふべぬ日ふく便ゆく朽をく。いとど病員ゆふぬ。ゆ豆ぬ〻ゆ不孝の
罪。来世をゆるゆも。贖ふゆ時ゆるゆべ。そもいるゆ豆ゆ父祖三世忠義ゆ人ゆ
傷ゆるゆも。実ゆ人ぬ埋木の。浦世ふ疎く月も日をゆふ照させゆふぬゆや。
親を思ふ惜ゆゆね露の命もさゆぐゆそ。いとをゆくゆそゆ。といひゆ〻ハ異ゆ
うちかゆべ。番仕ハ灰ゆぬ坦を火箸を立く嘆息〻。禍福時ゆ豆天ゆり命ゆり。
憾へゆゆど悲むべゆど。やを豆信乃。ゆぶ糠助ゆ渝せ〻よ。汝ハよゆも使ざるゆ。
汚教書の支ハ死くゆ謀る。彼人ゆの寓言ゆり。かぢゆ豆の伎倆ゆく。小児をゆ
欺くゆも。いゆぢう番仕を欺ぬ沒人ゆ墓六ゆ妨ふ海く。糠助ぬ賺〻ゆ。宝刀を

掠畧んなるのこいと残なるみる所行るゝぞや。抑この二十年年来渠さゑくよ
り幼く盡しく。村雨のあん佩刀を奪ひとりんと志るゝ上。幾遍とのゝ成ちゝど或ハ
人をかゝゝひく。利ゑ誘つく價貴く。彼一刀を買人とのゝ也。或ハ更爾人定まく。
牆狐踰鎖成鎖ひ盗そゝんとせ一夜もあり。渠百計を施せど。又百乃
備あり。この故ふそみ悪念今ゑ至ゝ果をゑよるゝ。いと朽をくゝ成ゝ。
企ふけゝたゝゝぎゝ渠ゝ犬ゑ傷けそ。その髓胷を遣をのゝ。こゝゑ悪念
復起り。御教書破却ゑ假托ゝ。宝刀をとゝんど好計ハ鏡ゑ写ゝく照るゝ。
抑年来墓六が望を宝刀ゑ被るゝ。渠ゝ父の遺
跡と稱ゝく。莊官ゑハゝゑゝ。相傳の家譜舊録ゝ。ゝゝ件の大
刀をゝく。家督を爭ゝ難義ゑ及ん。ゝゝ一ッ。成氏朝臣没落のち。よの地ち
既ゑ鎌倉ゝる。両管領の處分ゑよゝる。渠ハ則管領の敵方家臣の遺跡ゝ

ちゝく。舊功舊恩あるのゝゝを新ゑ微忠を顕さゝゝハ。莊園永く保ちゝん。
渠ゝちゝゝ二ゝ。よゝゝく村雨の一刀を鎌倉へ進上。公私の鬼胎を殺除て。
心ゝ安くせんゝゝ。既ゑ妖の為ゑ。その莊園を角ハゝゝ。ゝゝゝ一口の大刀を
惜ん。ちゝハゝゝ件の宝刀ハ幼君のゝん像見亡父の遺命重ゝゝ。この男と
共ゑ滅ぶゝゝ。妖夫ゑハ贈ゝ。又その初村雨ゝ成氏朝臣へ進ゝ。ゝゝ
ちゝハのゝゝのゝゝゝ春王安王永壽王みゝゝ持氏のゝん子ゝゝ。ゝゝ父ハ
春王安王両公達の傅ゝ。この両公達ゝゝゝ宝刀を君父の像見ゝく。
ゝん喜提を吊ゝ。親の遺訓を業ゝ。永壽王へ進ゝ。ゝゝ
ゝハゝゝゝゝ。ゝゝハこの義ゑ仗ゝゝ。汝ゝ人とゝゝゝ件乃宝刀を
智殿左兵衛督成氏朝臣ゑ献せゝく身を立さゝん。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ
秘ゝん。今宵汝ゑ攘ゝ。ゝゝゝゝ。刀子を拐ゝゝ。渠ゑ


番作遺訓
を授
犬の

帶雨
南南楚
知春北
入燕
犬塚番作
佐々見大刀さやゝて出る月はまゆ
雲きれしく行むら雨乃そ玄同

釣し大竹の筒を目がけて丁と打ば釣索弗と打断て筒ハそがまゝ磯と落留両段に割れてあらはれ出るハ是村雨の宝刀なり。番作ハ遠しく錦の嚢の紐解けて恭く額に推あて霎時念じて抜放せば信乃ハ間近く居るほどに鍔根より刀尖まで。瞬もせず打熟視る煌さゝる七星の文照耀て三尺の氷寒し。露結びて霜凝て。半輪の月かと疑ひ邪を退け妖を治めて千載の宝と称ぜし唐山の太阿龍泉我邦の抜丸蒔鳩。小鳥鬼丸なンどいふとも是にハ及じと見えさせたる上もなく番作ハ刃をかへして鞘に納め信乃に此宝刀の奇特を見するや。殺気颯と含で抜放せば刀尖より露霤て。鞘を砍ば刃に衅りてその水ますく濺ぐ春に随ひ散落る。譬ば彼村雨の樹梢を風の拂ふが如し。しかるに村雨と名つけらる。これを汝にとらせんよ。そのかはりてハ相応ならぬ髻を短くし今よりまた大塚信乃戌孝と名告るべし。かくて二八の春をまちて。もとゝとに甘ん[illegible]

又宿病に苦められ。ながく存命がたき身としりけれバ死ざれバ翌死んよしや霎時ハ死なずとも今茲の寒暑ハ凌がたし。只恨むハ汝僅に十一歳孤となりなんとおもひかけて又嘆息を親の顔をうち瞻ま。とて行る所宜よからん縦ヨヌ病にまれおもとも。おん年五十に満ながらなんでふさのふゆ死命なるやよ羽生よりまゝならぬ祥を急せなバ御教書の真実すく。搦捕るをまたバ。おん身捕兵を引うけて。吾侍を救ひなんとの。おん底意にゆかぎや勿体なし。といはせも果ず呵々とうち笑ひ御教書の事詐欺なれバ搦捕る咎も追然なかなか嫉の詐欺にもあれ糠助に汝が事を懇切にいひ来されしハ幸なれ死期遠からぬ親が癒腹今面にかくまふ。汝を嫉みて枇人ぞといふにいよく呆れ果おん言葉とも覚ぬものなる身親なれども彼人ハ大さかならぬ寃家なるに。故なくおん身を罵ひて。寃家にその子を寄しなバへ[illegible]と詰れバ

父へうち点頭そを疑ひハ理まことそで則ちぶ遠謀村雨の大刀も奪れど今ハ
姫のゆゑ借すく汝を人と成さんのくそをかくても存命ゑゑ親が自殺ハ子と
肥き苦肉の一計ろりとゑくぎや。ゆゑ姫夫婦ハ利ゆ耽ゆ恩義を忘ゑ性一
ども今番他ぶ自殺ゑ笑ゑ里人いよく長ゑ憎ゑく。集合ゑその非ゑ弥ゑ
とりやあゑんと阻むべ。ゑゑんまハ真實ゆゆ汝を家ゑ養とゆ実意を示して
里人ゆ憤ゑ解ゑゑ。又この宝刀ハ姫夫婦がゑゑゆ賺まとゑ素より親の
送命あり人と成る後許我へ来ゆく。督殿ゑ献らめ。このゆゑ兼引ゑ
固く阻ゑく常住坐臥ゑ。その盗難を禦げ。宝刀全く蘆六がゆゆゑゆゆ
といゑども亦その家ゑあゑゑゑハ奪ゆゆ易くと心放く。緯息ゆハ通るべゑず。
二重ゑ防ぐハ汝が智ゆゆゆゆ。憨ゆ宝刀を隠さば奪ハともる心弛ど防ぐとハ人ゑ
竟ゆ暴ゑ人便是黄叔度が琴を鼓く群賊を退けくとハ謀ゆゆ。募

兵戍るゆ堪ぎゑ。よく敵ゑ疑せ危け此ども選く安く。九死を生く一生と成んとゑ。
寔ゆ大智の徳ゑ。機ゆ偏く変ゆ應じ防ぐゑゑ禦ぎゑん念ゑくとれ我忘ゑ
べゑぎ又ゑゑ姫夫婦。漸ゑ志ゑ改めく。實ゆ汝を憐ゆべ汝も亦誠心ゆて仕て養
育の恩義ゑ報へよ又その害心已ぎて遂ゆ禦ぐゆゆハ宝刀を抱ゆく速く
去れ。五年七年養ゑくと汝ハ大塚氏の嫡孫ゑ。墓六が職禄ハ汝が祖父乃
賜ゆゑゑその禄ゑゆく人とゑゑゑも。伯母夫の恩ゑゆゆ。縦報ゑぐ去れば
とゑく。こゑ我不義とゑゑゑべゑを。こゑゑの理ゑもゆゑゑべ。縦ゑ呼かくの上。長くゆ
あゑゆ餘命を貪ゑ。この期を過くく後竟ゆ病の床ゑ息絶ゑゑ。伯母ゆ汝を養
つぎ宝刀ゆ人のゆゆ落く。謀ゑくゑゑ。画餅とゑゑん。このゑん佩刀ハ君父の像
見首陽ゆ蕨を採ぎとゑゑども。二君ゆ仕ぬ番他が。最期ゑこゑ我借ゑゑ。
奇特我ゑゑん。と村雨の宝刀を再びとゑあげく。抜放さんとゑる後ゆ信乃ハ眼く

拳に拊乃て。後くまらぐ謀せし豫て覚期のおん自害ハ飽まらく吾儕を思召させ給ん
慈愛をこそ見まゐらせ。恙なくぞ。禁めなばなほゆるかぞよしや難治の病著るものなるが公の
及ん稲良薬良医に心を竭させらる者と冊ちまで遂に届ぬものなるべうち
歎れたくも得るべし。ここを正しく見定めらるるのとくくるるに腹切なれど人只狂死と
ゆめしきまし。今宵に限るとらへとらせ果ど声を激し虚けれと泣のよゐのゝるる
死さへ死時に死ざれバ死ざるにもまさる恥あるなり。嘉吉のむかし結城にて討死
ざりし君父の為に寒とる途なり。苟も三年の僑居母の今果になほざり
にんし生居甲斐なき恨みあるのみ。よしやれ九年あまり。なほとるものなく偸
食の民とあるハ露命を貪りて今又子孫の為に不思なく。いかなくし存命べき
千曳の石ハ転すとも心ハ転すべからず。禁るハ不孝こ今にもあれ。隷助が来る
とあらハ妨せん其知恨まずやと敦圉て。左右を伸しく捺久せず。堅く断離き駭さえ

峯目らく。転轆つく拊ろさる。右の拳をも些も放さまぞ。おん叱りて紫るともとのいのちを
ふところに悖まて禁め得るにもあらさせ女ん。と浣著。刃をとらんと喘遑まとも小
腕に及ぬ必死の勢ひ放せくと怒の高声。子ハある度寅縁る一生懸命果しるけ
まい番作ハ。うろが子を楚と推伏て背に尻をうちかくる病臭ても勇士の働き。
とハ何とせん哀しやと信乃ハ岡てらく遍ろ及かんさんとしつれども恩愛の壓る愛
著の枷も鉄輪も推居らまして。又せんまうハるものけり。その隙に番作ハ襟うき
まらく裃衣推袒らく刃を引抜き右の袂を巻そへく氷るをも刃尖を。
腹へぐさと突立て。まつろ静に引遶せバさと潰る鮮血の下に布るるの子ハ
血の涙親ハ刃をとり直し。さまとぶに弱る右の手に左の拳あちそへく吭のあたりを
刺んとく突外しつ。ゆうゆくに咽喉を劈き俯に仆るを親と身を起き信乃も
半身韓紅そぶまく父の亡骸に抱き著つよくと泣。その形勢そ秋寒き風に

ちからとし蔦のみぞ。更に枯木に寄るが如し。浩処に糠助は番作が回答なきを
暮て又来ぬ庭門に進て随に信乃が泣声。縡すそあらめと抜足して且外
面より窺ふに。思ひかけなき番作が自殺に駭れおそれて舌を巻き。毛骨
いよ立歯根も合ず。戦出して留らぬ膝を押て裡面へ入るへらず立えぶん
と思へども。生平ならば足重く。雄は留むれども腰を引まどひて心地
しら辛ぐく庭門のあなたへ出て息をつきし先ならや縡の趣を長に告んと裾
端折て飛が如くに走去りぬ。信乃は涙の曝布の糸乱れ。人あればともしらず
しばしく嗄るまで哭ぬれど。さて在るべきならねば。ある甲斐なき心と思直して
幼なくも跡の攫杉をしやうやう年の今四ツ五ツなりける刀の下に斬敷れて親
喪ひしにも劣らず声を限りに泣べとして又夜ともに口鏡ばとく絶てその甲斐
なき親のおんためにあらねども御遺言の趣は耳に留まり腸に染渡り

つ為なれども背くべからず思へども。錦の嚢に毒石を裹みし伯母伯母夫に
養まゐる望しからぬ。加以譏れて宝刀を奪ひとらるゝはこの身の不孝なれ
親へも子へも鉾は取らじ戦場には父子共侶に討死せるもの徃てかへり見憑し
からぬ伯母をよるべに后おぼつかなき世を渡らんより還て父祖の名をくださん。親
あるべしと憂ゆるも嫌はれ。今よりよしく雉が為に百折千磨の艱苦を忍ん。
御遺言なれば称きども。行歩ならぬ家ある大人追著て我が引き襯出乃
山路をのぼる共に踰て母御に会ひ待らん。嗚呼命なるかなとむとこちとちに父が
自然放せし村雨の大刀をとり挙て。灯にさしよせてうち返し。赤めしみて奇
なるかな水のしく洗ひ流せし如く。焼刃に鮮血を染ざりけり。親の如ざる信
乃が自殺もこのおん佩刀をもてせんなりしと有がたく推戴て。折から檐下に藁
蓆敷て臥たる犬は深痍の苦痛堪がたきや。長吠する声に信乃は佶と見かへるに。

阿寺四郎ハまご死ざるとけり。彼犬を養くこと生れ彼犬おそるゝ父死喪ふこの
ちゞめ死失絶死ぬべ。愛きゞく又憎むべ。然そもこの畜生を捨おんゝ不便
なるとよふ生ゝ死その鎗痍通霄苦痛をせんよ速よりがゆゑかゝ畜生ゞ
し死を促もるかゝる宝刀を穢しるべいとも恐れこゞるゝ。鮮血ゝ染ざる刃
の奇持亦是雖ゞ為ふ惜人いでや苦痛を助けてゝるさせんゝ。やいふと問うけく。
大刀を引提く縁頰よゝ。内ゝと下りくふゝ揚る刃ふおそゝ與四郎ハ。女
前足と突立て項死伸しく死切ゝとのいぬたるゝの健氣さふ。大刀振あげ
拳をよりゝゝ年ゝ親の養さてのゝ馴ゝ押著し
現身のいぬをいぐ砕るべゝと思ひ為ひ躊躇しさるゝもこの物ぞり。
霎時ハかくとゝとゝ羽ゝ死ゝ息絶ぬ又伯母ゝの母死ゝ
如是畜生慶喜提心と念ゝ。内ゝ刃の下ふ犬の頭ハ機地と落。さと潰る

鮮血の勢ひ五尺の紅絹を掛るとく。激然とくその声あゝ。猛然とくく立
沖る中ふ晃く物ゝそあゝと左ゝを伸ゝく受留ゝ。鮮血の勢ひ衰へ遂ふ
再び潰ゝ信乃ハ霜ゝ刃の水氣を袖ゝ拭ゝく遽ゝく。聲ゝ絶ゝく腰ゝ
帯彼創口ゝ生ゝる物死。濃血拭除くつらくゝふ見ゝ一顆の白玉ゝ
その大さ豆ふ倍ゝく。幼融の孔さゝ。緒締ゝどいふのゝ必ゝ
記總ゝ。思ふけるゝ物ふゝ。明ゝけ
月の光ゝふ。さゝ翳ゝ復ゝ見ゝ玉の中ふ一丁の文字ゝ。方是孝の字ゝ。
現刀ゝて鐫ゝふゝ。又漆ゝく書ゝふ。造化自然の工ふ似ゝ
小勝死拍く感嘆ゝ。吁奇ゝ。この白玉妙ゝ。この文字。
ちゝとゝ。倩思ひ合ゝ。冊一子を祈ゝ。瀧の川ゝ
途ふこの犬を養ゝ愛ゝ見ゝ。ゝくゝ又家路ふ

志の
番作

己丑六
自殺を決
志のよ
て信乃與四
郎を砍る

現ふ神女を目擊し。一顆の玉を授らるゝ。仍行恣く受外し。玉ハ犬のほとりふ輾ふ。
とゝんとゝく索ふふ遂ふ又あるとゝ。この比よりまゝく有身ふひく。次の年秋
のちゞめふ吾侍を挙のひゝそ。母の告させふて去りぬそのち家母の長病
病著佛ふ神ふ祝ひゝ。驗ゝそゝびゝ。その玉の失ゝる故ふ年く病く遂ふ危窮ふ
至ゝせふ欲。いゝぐく索ゝく件の玉を再び獲ゝば母の病著順快ふゝるのやと。
ゝ紙ゝふ被ゝゝゝ。ゝもせゝゝゝゝと。ゝゝゝ玉の求めゝく出べゝよりゝゝゝゝハ。
家母へこの冬月ゝゝふのハゝれゝゝゝゝ三年のこの秋今霄家尊の自殺ふ
吾侍ゝゝ冥土の侶とふゝけゝく。創めゝ犬の瘡口ゝゝ。不思議ふ出る玉固
三親ゝゝ喪ひゝ。ゝゝゝ期の今果ふ及びゝゝ名を表る孝の一字。信乃が実名ハ
戍孝定ふゝゝる玉ゝゝゝゝ。六日の菖蒲十日の菊ゝ仔ゝゝゝ。ゝゝ腹
ゝく。庭へ燮石と投擲ゝゝハ玉ハゝゝふまく反ゝゝく。懷へ飛入ゝゝ。怪ゝと

ゝく。と撥拶とゝく。又擲ゝゝ飛ゝゝ。ゝゝゝと返ゝと三ゝゝ及ゝゝ呆ゝ果ゝふ
又き雲時拶ゝゝゝ。この玉寔ふ灵ふ欲家母が疱ゝひゝとゝ犬が
呑ゝゝゝゝ。十二年の今ふ至ゝ。齒牙堅固ふ毛の光澤枯せゝゝの血気ゝ
衰ゝゝハ腹ふとのふゝゝゝゝ。ゝゝ是二ゝゝゝ世の重宝ふゝゝん
ゝん。緩階侯趙璧ゝゝゝゝ。ゝゝ惜ゝゝぬふ宝ゝ惜ゝゝ死を止ゝ
らんや。貴人の亡骸ふ珠を含ゝ寄る例ハあゝゝゝ。ゝゝゝ又宝を瘞ゝ益の所ゝ
宝刀ふ玉ゝゝふ死後ふ人ゝゝ取ゝゝゝゝ大人ふ追ゝゝゝゝ時移ゝぬ
と嗟ゝゝく。舊の恩ふゝ。父の死骸ふ推並び既ふ最期の坐を占て宝刀を
三ゝゝゝ戴きゝゝ緒膚を推祖ゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ左の脇ふ大ゝゝゝ。ゝゝ
ゝく。形狀壯丹の花ふ似ゝ。ゝゝ付磨ゝゝふ。ゝ肱を曲ゝゝゝゝ。ゝゝ推拭ふ
ふ習の墨ゝゝふ。苟ゝ塗ゝふゝゝゝ。ゝゝ色黑ゝ痣ゝゝゝゝゝゝ。ゝゝ脫ゝゝ

搞れきのふまでもけふまでも。こゝにおこの癍あるとは。齋みの玉が瓦かゝるく。
懷ゐ入ゐ。とゝ。左の脇へ礫と中ゐるく。些痛をおぼえゝ。そは。ゐ癍著べうや。
あらぢ。國の傾人とさるとゝゐ。ゐらくの妖孽あゐ。人の死人とさるとゝゐ。ゐ又
妖怪をゐるとあゐと。親のをゝえも。漠藉ゐも。豫くゐんゐるゐ。是ゐゐゐゐ皆是
ゐのゐ。ゐゐひゐこそ。ゐゐゐゐ。土ゐゐゐゐゐの瓜癍を黒子も厭人や。と勇氣撓ぬ
稀世の神童。智恵も言語も古人ゐ愧ぢ。甘羅。孔融。幼悟の才。今又まゐゐ
この子ゐゐ。自殺の覚期ぞいとをゝゐ。春の夜ゐゐ。短くゐ。ゐや。初夜告る
寺ゐの撞も。ゐ常の音もゐゐ。信乃ハ額の乱髪ゐゐ揚ゐ。宝刀をゐゐ把ゐ。
嗚呼ゐゐ。ゐゐゐ。ゐゐ。ゐゐ。考妣尊灵。一蓮托生。南ゐ阿弥陀佛。と唱ゐ。
刃を見ゐとゐ。抜ゐ。腹ゐ切ゐんとゐる。ゐゐ忽地庭の樹蔭より。ゐゐゐ信乃
等。ゐちゐ。といとも。せゐゐゐゐゐゐゐ。男女三人。ゐゐゐゐゐゐゐゐゐ。ゐゐ縁煩

ゐゐ。齊一支ゐ入ゐけゐ。

第二十回

一雙乃玉児義を結ぶ
三尺の童子志を演

信乃ハ庭ゐ入ゐゐゐ。ゐ禁るその声を聞くとゐ。些を擬ぜ。ゐゐ
刺さゐんと刃を挙るゐ。筋縮ゐ脇癱麻ゐゐ。ゐ死を速ゐまゐゐゐゐゐゐゐゐ。
打ゐ。とゐく遍ゐ。ゐんく。とゐゐゐゐ真先ゐ進むゐゐゐ是則別人ゐゐゐ
嚮ゐゐゐゐ。ゐ助ゐゐ。吐嗟とゐゐゐ。騒ぐゐゐゐ。白刃ゐゐゐゐゐゐゐ。
後ゐゐゐ立遶ゐゐゐ。矢庭ゐ信乃を抱禁ゐゐ。前ゐゐゐ蟇六亀篠左右ゐゐ
脇を攪ゐ。聊も動せぢ。且ゐ刃を放てよゐ。とゐゐゐゐ信乃ハゐを緩めぢゐゐ
面ハ紅ゐとゐ。名告ゐゐゐ伯母君ゐ夫婦何とゐく来ゐゐゐゐゐゐゐゐ。
ゐく亀篠酸鼻ゐつゐゐ親ゐゐゐく。ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ黄童

るまどもさらーげんみぢうよく辨へる人。「こゝハ主素よりまた女子の身とーて。こゝ兵が
呼帶を奪ひ取あらぬ。父母者ハ討死せ。と風の便まふ伝のえーとろ。切てこゝ
親の蹟を立んと思ふ。だるまふ墓六どの死屍ハ拾ひ取て車に庄園をかりて村長
さんみなまた登まーー夫に科ハる死ぞとよ。余命ハ存命と。故郷よかへるべど。
足慰さう。職ハ堪ぶる身を見えぐ。吾侍夫婦をいとしう。憎こそ絶
せーるまん。ものが仏の僻ハーそ強顔を者と多人ども。腐爛てこ指ハきゝまーど。
世度御教書破却の越度。いとぐ親子を救人と心死盡を甲斐ゆるゝ。
番作ハたや自殺ーて。そうるこも共ハと衛剪ーハ推てころハ似げるの死短慮死
るハ及ばぬど。この末を目覩てよと練まバ墓六瞼をたゞさる死番作が生前ハ
こゝぶ本来の赤心死ぞよせさるまに残念ハ切くその子を養ひとまく。女児濱路を
妻せるバ先祖の血絡断絶せど世ハ人ハを憎まーこゝ身ハ後ハをるまん。

ハ死信乃よく覩けゝ御教書の真大さるるぬ越度えとハいひろがゝ原畜生
の所為ふまく犬ハさらんその妻ーる。番作が命死隕せバ一切後難あるべゝど。
縱その子どもらハ。あん咎あまとハハとも。こまに亦よろーくゆとる死なん郷ハ糠
助が支ままく。如此こと告ーハ固よまま義施の親族ゝりとも自殺の変を
覩るべゝ。あは雙獻の忠死せんや。と考くまバてそたるまどを汝が必死を
禁ぶるまに。ものを。と言葉を竭せバ糠助も共侶ハ辣めゝ。信乃ハ
つゝくうちゆくハ。ハつハ似ど伯母夫婦がよハ憑ーる慈愛教訓宝刀のるゝを
一言ものいはざるまとろ憎ーー皆長こまに死欺くゝ人寛ハおのが親ゝが人を
えまぬての聖の如く未然を察ーーものひぬる。父が遺訓ハこまにけまかまバ自殺殘
ゝひとでまに且く伯母ハ養まく。人とゝ人と尋思ーハ。かうかハらち点頭ゝひ
がけるる死方ざるのあん慈ゝ死蒙まそ理り逼く禁めるバ死後まくゆゝ鎌倉

制度ハ申及ばず。大刀さえ出さぬ及ばぬ。命ハ後ひなぶんとのくび。蟇六眉根と
よせ。宝刀のゆくへ。そもそもハ。せんるの生賢ゆく。亀篠が出ぬとゆゑ。
せんとすれのひつゆ。親よりも。譲受ける物ハ。和殿が隨意せざるんや。ゆうち解て。
親族ぐしよ。ひくまるゆく相撲ふべ。孤疑氣散ゆくゆゑ。ゆうちよりゆ。
実ゆゆく。三方よりも。練ゆ。信乃ハいよゆくゆゆ。ゆゆゆ。
ゆゆ。ゆゆゆ。とゆゆ。食欲ゆく。ゆゆ隨些退けハ。信乃ハ刃を鞘ゆ納て。膝ゆ
直せどおちつゆ。身の久後ゆ。ゆゆ難く。黙然ゆく居ゆけゆ。當下蟇六亀
篠ハ。棟助を宿所ゆ。ゆ。小厮一両人。喚ゆゆ。葬の事を指揮。その夜
番所ゆ。古骸をゆ。飲ゆ。蟇六ハ宿所ゆ。亀篠。棟助ハ。ゆ。
棺ゆ。通夜。信乃を慰ゆ。次の日。ゆ。人を。菩提所へ。送ゆ。ゆ。里人ゆ。ゆ。
ゆ。追慕ゆ。ゆ。この日。棺を送ゆ。ゆ。ゆ。信乃ゆ。

ゆ。ゆ。ゆ。面目ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。蟇六亀篠ハ。番所ゆ。自殺を
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。信乃ゆ。自殺を禁ゆ。ゆ。隊ゆ。番所ゆ。謀ゆ。
遍ゆ。御教書の。ゆ。ゆ。ゆ。犬塚親子自殺。ゆ。里人ゆ。憎ゆ。ゆ。
破。ゆ。ゆ。ゆ。信乃。ゆ。養ゆ。里人ゆ。疑念ゆ。解ゆ。ゆ。ゆ。悪
ゆ。ゆ。ゆ。夫婦。猛ゆ。商量。ゆ。ゆ。ゆ。実ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。信乃ハ。素ゆ。
その性聰察。父の遺訓ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。蟇六ハ。
亀篠。ゆ。ゆ。ゆ。信乃ゆ。大刀。ゆ。ゆ。ゆ。
つゆ。ゆ。ゆ。蟇六ハ。ゆ。刀。ゆ。ゆ。言
舌濁ゆ。顔。ゆ。変。ゆ。信乃ハ。ゆ。心決。父の先見明智。ゆ。感。
ゆ。自殺。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。信乃ハ。ゆ。番所ハ智勇の士。
惜ゆ。不幸。ゆ。表を。ゆ。珠玉。ゆ。泥中。ゆ。埋。ゆ。名。

口碑ゐ送りけり。間結休題。葬の夕果して亀篠ハ又蟇六と商量して。
信乃を召とゝんとす。迎の人を遣せゐふ。信乃ハせめて亡親の中陰果て
後ゐこそ。命ゐ從ひ奉らゐゐ且く許させゐとの。是も亦理ゐるれども。
黄童一人ハ置くべし。糠助ハその宿所いとゝ近ゐるれハ朝ゐ夕ゐのよもを
さゝぐべし。額蔵ハ年紀も。信乃ゐハ芳ゐ勝りせど。言葉敵ゐるゐのゐ
なんぞ。然らバこの小厮どもゝ。薪水の労をよく供ゐと分付て。信乃が
かゝえで遣しける。さゐ程信乃ハ是ゐ本心を隠ゐんとすゐの間監ゐ。
とゐひしゐハ苟ゐも心を放さど。ゐづゐゐ火を打水ど汲こ。父母の霊牌ゐ
つゐ。喪ゐハ能ゐくもゐ須ゐ早晩ゐ花ちゐ。若果ゐよもと月山辺ゐ
杜鵑鳴く比ゐぞゐりぬ。信乃ハ日来額蔵が言行ゐゐをゐゐゐゐゐゐ
温順ゐして。村落の小厮ゐ似ず。まゐる庄官の虎威を借てゐれと侮る

氣ゐハゐく。のと老実ゐ仕しゐとゐゐゐ深く感佩しゐ是ゐ多くハ疑ハず。
有一日額蔵ハ信乃が垢つゐ汚れしを洗ゐ。ゐ人の三七日ゐ。ゐや過させ
ゐ。しゐゐ髪ハ結たまゐどゐ。行水ゐ引ゐゐどゐ。湯ゐ沸てゐゐとゐて
信乃ハゐゐ点頭。現ゐ月の暑ゐハ堪ゐ難ゐ。南風が吹入て。
掻ざる垢ゐよれる日ゐ。よくこそゐれ。浴させんとゐ。躰て縁類のゐとゐ
立て。衣を脱ゐどゐ。須ゐ額蔵ハ大盥ゐ。湯をゐゐくと汲入て水こし絞み。
ゐくゐの背後ゐ立遣て。徐ゐゐ垢と掻んゐゐ。信乃が脱の痣とゐて。
和君ゐゐ。この痣ゐ欲吾倚ゐ又似ゐゐ。是ゐゐとのひゐけく。
推祖ゐく背ゐ示ゐ現身杜のゐゐより。右の胛の下へゐけく。黒くゐゐ
ゐる痣ゐりけり。その形状信乃が痣ゐゐ一般。ゐゐゐ額蔵ハ袖と收く
裨ゐゐ。吾倚が痣ハゐゐゐゐゐゐゐゐゐ。胎内ゐりゐゐと少ゐ。和君も

今る中に向ふ。信乃へ只笑て答ず。額蔦ハ又緑るを庭のくゝふ指ーく彼処
なる梅樹のもとゝふ新土を起せ。とおゞーくく。些高き丸あゞ彼ハ什
麼何ぞと問ふ。信乃答てあれこそ其許ふをゝれゝる犬を埋ー処とのこと
ひ。額蔦嘶くるおのゝちゆゝく。させる仇ふあらざるふ。ゝう孤元人ハ畜生ふ。
傷けるふ由綾る二ゝあり。吾倩も亦彼犬を打もー。刺をゝゝぶんゝと和
君ゝ必れさるるべー。さもあらざやと事毎ふ心あるげふあいひかゝゝど。
信乃ハ是ふとゝち笑のく。亦その是非をいゝとはゞかゝて信乃ハ俗ー果て。
あゞその衣を揮ひーゝび。忽地袂の間より。一顆の白玉轉び落るを。額蔦
ゝゝとゝゝ留めくつくゝとゝて。不審や。和君ハこの玉獲ぬこー。抑亦
家傳の物歟由来を笑ゃふ。ゝけれといひつゝ。眺てゝゝとゝゝ。信乃ハ玉を
ふとるく。ゝれ一朝ふ親を喪ひこゝろの憂ひゝるくて。この玉と送れ

たり。ゝゝらさぐの縁故あり。とぞゝう答て詳ふ告孤ぶ額蔦ゝゝう歟ゞを数回
歎息ー。人面同じかゝらざれども。他人ふもよく似るものあり。人心同じかゝらざ
ども。又知己ゝといふべゝらざど。和君吾倩を疑ひゝゝや吾耶を蔽をゝる
是ゝゝ是也ゝといひけく。膚ゝる獲身囊より一顆の玉をとゝ出せば。信
乃も又所ゝく。ゝれと掌ふ受てゝるよゝぶ玉と一点異るこゝる。但
その文字同じかゝらで。義の字鮮ふ続ゝゝう。こゝふ至てゝ。ゝく感悟ー。
茶ーくその玉を。額蔦ふ返ーていふゆゝう。吾年少く。才足ざれハ眼あれども
ゝる孔ゞ如く。ゝゝく足下を認らざーて。初ハゝく疑ひさ。日ゝう歴る隨その
言と行を。紙つゝふ。ゝゞ及ざる所多ゝう。元人ゝゝじとゝゝふゝゝう。素性を
問ふよゝるくて。けふまぐへ黙止ゝう。ふゝるよけふゝゝらざども。身ゝ相似ゝる
癖とゝゝつ。又この玉の等ーゝあり。必是宿因の致ゝ所一朝の縁ふゝあゝじ。

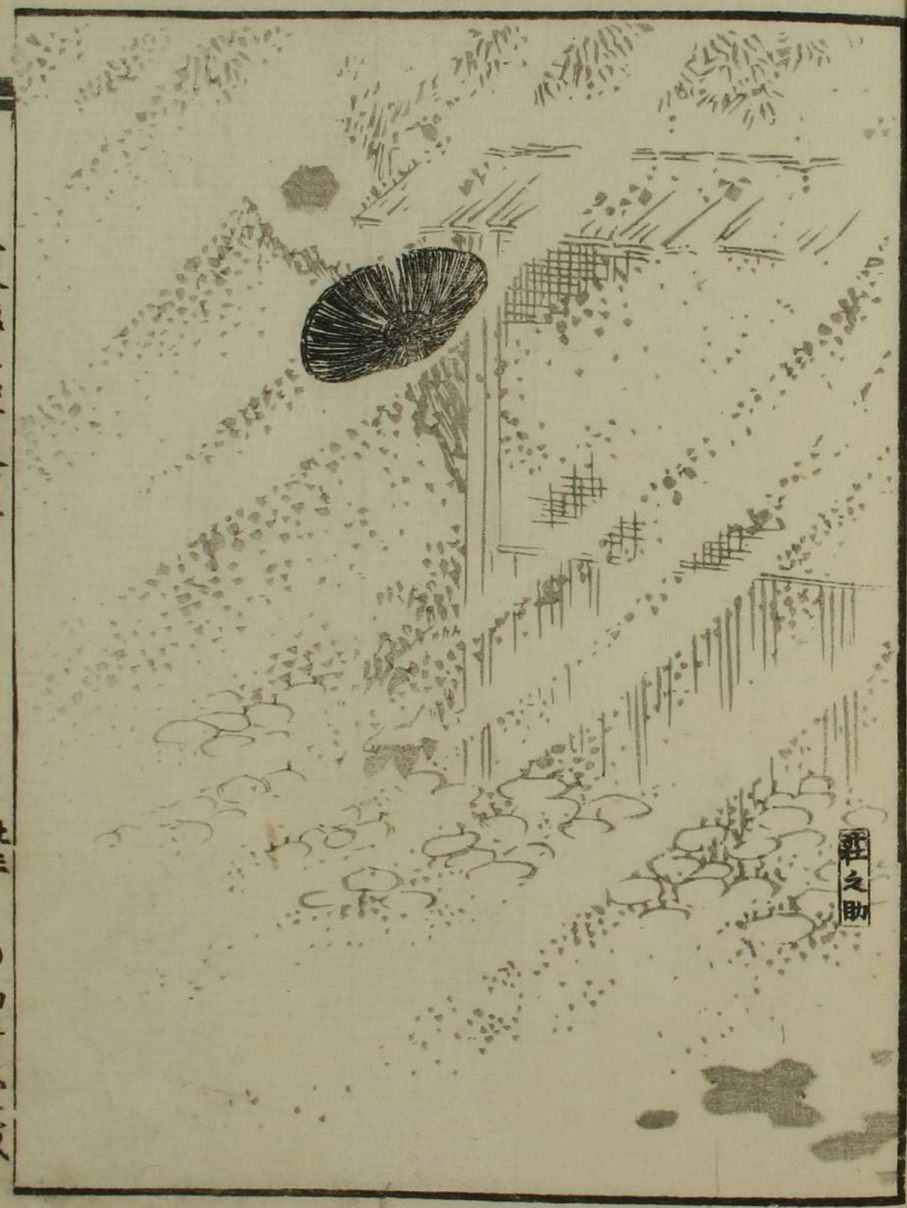
先こそ玉の由来を觧べし。この玉ハ箇様〻〻。如此〻〻の事ありと神女影
向のあづめより。與四郎犬が死を促して。なほもその創口より。玉を獲たる
終、はやく猛き瘡のいで来し支父が先見遺訓の趣此ニも嚴さと觧示せん。
額藏ハ耳を側て。坐に膝の進むを覚ず。且感じ。且嘆じて。落涙を禁め
あへず且して。貌を改め。世に薄命なるものゝ事のみならぬ和君が人を
聞けバ又後らぬも亦心比せり。折吾儕ハ伊豆國北條の荘官犬川
衛二則任が一子に。乳名荘之助と呼れし者也。嘗吾儕が生れしときに。
家の老僕なりけるもの。その胞衣を埋んとて。國の下を掘けるに出たり
なくらの玉を獲たり。只未曾有の祥瑞なるらんと人ハいひしとぞ。
背にありける。痣あるをもて父ハなほ心ゆかしげにその吉凶を
問んとせるに伊豆なる博士匠。但郷の黄檗寺に関帝の廟あり。

なるが父年来信じにければ。なほ為に久後の命運を問なり、念じて神
籤を拈るに第九十八籤を獲たり。その詩に

経営百事費精神　南北奔馳運未新
玉兎交時當得意　恰如枯木再逢春

とあり。なるが父聊文字あり。詩のこゝろを判せるに起句の文言なれども。只その
結句に頼あり。玉兎ハ月の異名なり。交るときハ満月なれバ。十五夜をいふ
なるべし。かゝれバこの子十二三才まで。多病なるとも。あやふからんずらん。しかれども年
十五より回陽本復して。如意延命の祥なるらんとぞ。荘之助と名けしと
母の物がたりにきゝつ。荘ハ荘盛なるのこゝろなるべし。さる程に鎌倉の武将
成氏朝臣京都将軍とおん中よからず。両管領に攻られて。許我へつぎおちせ
なりたるべし。寛正二年に京都より前将軍普廣院義教公の第四男。政

知とあらせ給を右兵衛督ゐ拜任せられて。伊豆の北條へ下させ給ひし堀越の御所と唱て。諸國の賞罰を掌らせ給る。政知朝臣武威ゐ募て。民を憐むこゝろ薄く。驕奢を極めゐ。狂ゐ不時の裸役ひとヨりつゞく。莊官らをめく。舊例を援て。苛政を練め。あぶく省魚を乞ひ。怨者の爲ゐ彈れて。御所のあゝ怒う酷しく。珠せうゑ。と変へ。父へゐとくうち熟きて。一通の書を送りつ。母ゐもろさで自殺せり。時ゐ寛正六年秋九月十一日。吾倩ハ僅ゐ七歳ろ。莊園家財ハ没官せれ。後類奴婢ハ東西ゐ離散して。身ゐ隨ふのもろ。さゝも豪家といられる。犬川の水涸果て。妻子を追放せられ。母ハ泣て吾倩がゆくと掖て曳者の由縁彼首の相識と彼此ゐ身を置まてハいと。悲しそ。その秋と。客宿ゐ送りく霰降る。冬ともろべゐ。ふりゐ。粤ゐ安房の國司里見の家臣蜑崎十郎輝武といふものハ原ハ彼廻の豪民ろり。母の後妻であり。彼蜑崎を乞あてゐ。母ハ吾倩を扶掖き。吾倩ハ母を慰めつ。辛して鎌倉ゐ到る。安房へ便船を求ゐけれども。今戰國の最中ろれば。海陸の通路さえ。彼処より船を出さず。下総ろる行徳の港口ゐハ上総へ渡る船あり。と人が絡てゆくハ。又行徳をとろさゝく。稍ゐ鄙まで来る程ゐ路費を賊ゐ掠とられて。宿借るべもあぶれ。已ゐ得ず。村長の宿所ゐ到る。三三のゐを告てその夜の宿ゐを乞とゐ。こゝろ長夫婦。その幾ろと。ゐ接待客舍もゐ付ず。小厮ゐさゝゐ叱懲して。うけ引べもあぶれハ。切く一夜を柴小屋の裡ゐろり。とも明さ。せゐ。とかゐ口説くゐも許されず。小厮して追出さ。せ。門さえ杜て。又久ゐ。日ゐ。やゝ暮て。雪ハろり来ぬ。進退其処ゐ究まく。親ハ音ゐろく。夜の鶴。子ハ又擔の寒雀


粧之助

七歳乃小児客路ユ母を喪ふ
犬川衛二郎妻

時に迷ふ行路の艱難。強顔さ人の門ごとに。呼入をとのやとあぶつ
るくも立在ど雪はまとくと降こるく。雪吹に五體を吹きされ風にとて
破笠の骨まで氷る冬の夜に母は固より持病に積り。秋より後の患苦
心労。客宿と共につのりく。病著にとり逼られいとも危くえ〻〻ぶ
勤り騒げど七才児が何せんとぶも。雪に先ぶる親は果敢く滅て
よふるる人の員に入りし。十二月廿九日のまるる。空しく骸にとり著て號
哭て天を明せば。長はその為体をちぢめくまりてうち咲て吾倩を裡面へ
呼び入れて。本貫を問ふ〻匿ど告るふうちも驚くどおぶるぶ母の
亡骸と重るが如く埋させ。その日吾倩と呂牛。汝は母と旅に喪ひうる
べき家もなく。又ゆくべき里もあじ。安房の里見は成氏方にて當所は
管領家の米地さう。かれば安房へは渡りがた。汝が母路費と喪ひぶ

門にさく死されば。葬のも何れとなく。諸雑費殿の没残あり。汝今よりるれよ
仕へて。勉さくれを報ぶば。久後とてもよるるあじ。さられ年るる幼稚に三四年は
食損之物の用ゆは立かさくえん。今れば年限も定めて。夏は貴布の帷子一つ。
冬は小妻の布子一つとをべ。それを過分の給料とおひとる。一生涯奉公
せよ。給銀とせぬそのかえゆは。養殺にみて得させんどとい〻時は恨〻く。
朽をるるも限りるれど。繋ぬ舟の楫を絶よるるるがいるともいられど。
これより長が小厮にせられて。五年あまりを送りゆる。されども志農業貨
殖を願ふとるる。今戦國の時に生れて。身を立家を興さどはよふ男子とる
甲斐もるーとともかくして武士にふるふん。とおひ決しは十才の春なり。森より長は
狐疑ふく。物始をとる人なるぶ。ゆゆ本心を顕さど善悪に就て主命に違へ
とるく愚直を示せばいで苛どく使る。奉公の片も業夜は深るまでも習に

盈へ秣を外庭に人目をたのびくつ。石を峯。木を折てひとり擊劍養法こ
試こ。教るこ。とかうかう。大刀をとぎを曉得こ。固よりものが志を傷
輩に尚ものせもべ人こる朝こて愚春蟲といふ彼ホハとべこ斗筥の小輩一郷
輿に謀ふ是こ。豪こぞ。豪こぞ君が俊才その孝行こ文学者こ。見ものこ
墓しく。こ見この人と交らハ億萬人こ値偶せんこ。憑しかこん。とべこの長こハ
美絶の親族こる。その人の子でをこれハ間ちく住へど物もいつまでおりも
あべいこで見ぶ志をこせん。と必ひしハこのこるこど。金ふ大人の自
殺ものこく。忽地に路ひこけ。騰和君の間人ことく。吾倩ふとへおけこと。手命ハ
見ぶ亟に千金ふまを賜ふ。之天の祐と竊に勢ぶ祈こく来てこれハ和君ハ
こく疑ひて日ころ経れどもこち鮮めハど。吾倩も又その意を猜して麗忽に
宿志を告ものこさど。且く時節を俟ハどに良縁竟に空こ。こで迭に異こる

肝、體の痣又一雙の白玉さく媒妙とこ見ぶ肝膽と吐こを得こ。方是病萑
花を啖こて。悲騰の翅を搏ぶて。輙魚雨を受て。喚喝の吻を潤をふ仰こり。
一生の歓會。何こ。ものこれに過人。望見りてひと縛詳に物ここりて志を示をふ
こ。信乃ハその薄命をこ見ぶ。その人に必ひこべく。彼の中毎に嘆賞し驚こ
ものこ和履の大志。見ぶよく及ぶ所に。現この玉が媒妙しく。忽地水魚の
ひを。因縁こ。ハあべこ。壁言ハ今示これ。関帝籤の詞の結句に
玉鬼交時當得意恰如枯木再逢春こ。今日の中こべ。夫月を玉こ
壁言玉と又月に喩こ和漢こその證多かりこれハ玉鬼の交こを。當に意に
得つべ。こ。この玉が媒妙しく。こ。こ交を結ぶをこ。拙。枯木再び春に
あ。こ。今この両人に薄命壁言ハ樹の榦大こ枯こ。片枝僅に残こが如し
これども不憶。刎頸の友を得て。迭に補助れ名を揚家を興こに至こハ。

枯木の春よみあらふあらどや。後栄共よろこぶべきのこと。神ハ人の求るゞ為ふ鑒納を垂ゆふ関帝の神慮いとかしこ。又そゞめの二句のこゝろハ。そゝる大人自殺して和殿母子ゝ南北ゝ奔走し。命運且く吉々ざるを示しぬゝり。されハ経営百事費精神。南北奔馳運未新とゝり。豈亦奇ゝるゞざるや。と巍示せば。額義狗の意を感悟して。信乃が才学の大々ゝるゞざるを稱賛し。且義ゝく額を拉吾倩ハ僅ふ日習して。俗字を繕ド得ゝるのこゝ文と学ぶの餘力ゝる。和君の解せのよみあらびハかくまぐ神慮の灼然ゝるゝとゝふ。ゝくゝるよみあらん願ふハ今より和君と師ゝゝ。竊ふ学問を奨人ふ教ゆゝゝとゝふ信乃ゆゝく頭と掉吾倩ハ僅ふ十一歳襁褓の中より学ぶとゝふとも。何支ゝゝゝるふ足ゝゝ事ふ父の遺書あり。和殿ゆ。学んとゝゝゝべ。貸ゝゝ。顧ふふ人ハ善悪と友ゝゝ。善ふ善友あり。悪ふ悪友あり。揮て志同きゝゝ兄ハ四海ゝゝ兄弟ゝゝ。吾倩ハ孤ゝゝゝ。和殿も又同胞ゝ。今より弟を結ゝ兄弟ゝゝ。和殿のゝゝふ。尚ゝて額義大兄ふ敬びゝふ固より願ふ所ゝゝ。よゝ楽を共ふせゞゝゝも憂を與ふせざるゝゝ。難死ゝゝく相救人ゆ。聊もふ盟ふ背ふ天雷立地ふゝゝを撃ゝふ恭ゝく上天ふ告。急ゝ如律令。と天ふ向ひく誓ひふ信乃も又大兄ふ敬び。ゆゝ共ふ誓ひふく水をゝく酒ふ擬へ。汲ゝゝその約を固し。さてその年の冬おを向ふ額義ハ長禄三年（伏姫自殺の翌年）十二月朔日ふ生れて十二才。信乃ハ七ヶ月ゝゝ則額義を兄ゝ。信乃ハ再拜ゝく。みづゝ兄と稱しつ。共ふ敬びを竭しゝゝ。ゝられ額義ハ上坐ふゝゝ。信乃又頻ふすゝめれハ額義頭をゝゝ掉ゝく年の冬おゝとゝれかくまれ。その才とゝてゝバゝん弟ゝそゝゝ兄ゝゝれ莫逆をゝく兄弟ゝゝ長少の座ハ定むべゝゝ。鄉ふ告たるゝゝ乳

名ハ莊之助入のまゝ實名をつけられぞ。かりのふ丸ハ孝とゆて一郷ゆ伝のこ
ゆ。且その実名ハ成孝るゝぞとゆ。ときゆ由てゝ彼白玉ゆ孝の字あるゆ寔ゆ
弃入又ゝぶ玉ゆ義の字あり。父ハ犬川衛二則任とゆ。よりてゝ乳名莊
之助の之の字を省き犬川莊助義任と名告るべし。ゝるゝ是どもこゝのはと
人ゆ告べゝとゆあぞ只ゝまとゝ丸ゝ丸とのゝ欲さる所業ゆ仗て名を汚さ
とゆあゝゆふと問まゝく信乃ハゝち点改名ハ主人ゆ後ゆのゝ義任ゝるゝ人
めぞゝゝゝゝ額蔵とゆびをせん時ゆ主ゆとゆゝハ莞爾ゝとゆ。ゝち笑てそゝ勿論の
ゝのもゝ。ゝ丸ゝ月とゝゝ月をかさねゝく起ゞ丸共ゆ世ゝゝ陽ゆ親しくもゞゞ
長夫婦ゆ對ひてハゝゝれをゝゝく丸ゝ丸と縁らん。ゝ丸ゝ丸ハ吾倩を嘲ゆゆへかゝの
如くゝるとゝゝ丸ハ嫌疑とその間ゝ置ぞ。迄ゝ後ゆとかりゝるゝゝれ既ゝゆの倩
とあり。その布ハ箇様ゝ。と難助ゞ亀篠ゝ嫌されてかゝしとゝゝ蟇六がゝひつる

る。その為体を詳ゆ告。そのとゝゝ吾倩ハ基子の間ゆ陽睦しゝく縛ゝるゆ。
寔ゆゝ丸ゝ丸の先考ハ人をゝるの先見卓し。行状四士云雙とゝゝはゝゝゝむ
べゝく。とゝひあゝぞ頻ゆ嗟嘆ゝゝゝゝ信乃ゆ共ゆ嘆息し。吾倩ゝ父の
送命ゆゝゝゝゝ宝刀を護ゝく腹ゝゝゝ伯母の家ゝ同居せバ。ゝ丸ゝ丸ゞ
資ゆゝゝぞゝく。宝刀を奪ゝゝと難し。示さゝく縛の麁。その
ゝるゝくゆと恭しく諾ひしゝゝハ額蔵且く沈吟しゝゝゝハゝゝと又ゝ丸ゝ丸とゝゆ
久くゝるゝ在んゝる。後ゝのゝゆゝゝ翌ハ病ゆ假托ゝ。一ゝゝび母屋へ皈りゝん。
ゝ丸ゝ丸も中陰果るゝゝまゝぞ。ゝ丸三十五日すゝゝゝゝく伯母ゝゆ丸ゝ丸へをとゝせ
ゞ既ゆ義を結びゝゝゝ。ゝ丸ゝ丸ゞ父ゝゝゝゞより心喪ゆ服ゝく報恩
謝德の信と竭さん何でゆ女しく花をゆ向経を誦のゝ孝とせんやと誓ゝく。
共ゆ番化ゞ霊牌を拝しゝ。この日のゝるゝ告ゝる折ゝゝ。碧空と足音して外面より

まるめあり。この人ハ誰そ者官三輯嗣次の日を等更ゆ次の巻の端ゆ解るべ。
他者ニ予ニの巻を草さるとゝ或人側より閲して難ぜ云信乃廿壮助ゆ
英智宏才あるといふとも原是黄口の孺子その年いまゞ十五ゆ足
らぬ。ゆゑ智辯甚卓し。絶て童子の氣象なし。寓言といふとも
甚過ぎ。蓋小説ハよく人情を鑿をりて。人倦ざ。今この二子
の偽の如ハ情を恃るゆあるべやといふ。予答ていはく。藩衣ハ
八才ゆして。鞭の師ゆ。畢子ハ五歳ゆして。禹を佐く。伯益五才ゆして
火を掌る。項橐五歳ゆして。孔子の師ゆ。いゆへの聖賢生るべきにて
明智俊才億万人ゆ傑出を固より鳳惠の列まゆあるべこの他の神童又
謝在杭嘗集録ゆて。一編の文采をゆ世り今毛挙ゆ暇ゆ
あらぬ五雜俎中ゆいへる人ハ犬士の如ハ亦且ゆ亜ゆ欠便且又

予ゆ戯ゆその列傳を他ゆ所以。
又犬川荘助ゆ父蔵
又犬塚蜑崎十郎輝武ゆ弱死ハ長禄二年のゆ又犬川荘助ゆ父蔵
二ゆ自殺せしゆ。その年より八年を歴て。寛正六年のゆ。ゆゑ
海陸の路絶て。澎二ゆ妻ハ輝武ゆ死を。ゆゑ安房へ赴んとて逆
旅ゆ才ゆして。婦幼の疑惑を解んゆ筆ゆ序ゆ自評をといふ

家傳神女湯　一包代百銅
婦人諸病の良剤ゆして。産前産後ちのみちゆ即効あり。ゆゑ此ゆ一産前産後功のこの書の前集さいて。我れ此ゆ書す

精製奇應丸
他ゆ此ゆ真物をえらぶ。家伝の加えをもて。ゆゑ量をもて法ゆ考ゆ製方なり。ゆゑ。その功神の如し。別ゆ能書あり。今略之
大包代銀弐朱　中包代壱ゆ五ゆ　小包代五ゆ　但ゆ壱貫不往

婦人つゆ子むの妙藥
毎月つゆ子むゆ。ゆゑ用ひ。ゆゑ即功神のごと。産後のゆゑ。ゆゑ
製藥并弘所　江戸元飯町中横下南側四方みそ店向　瀧澤氏製
取次所　江戸芝神明前いつゝや市兵衛　大坂心斎橋筋唐物町かりちや太助
半包三十銭ゆ　半包六十四ゆ

大阪
同　河内屋喜兵衛
同　伊丹屋善兵衛
同　敦賀屋九兵衛
同　秋田屋太右ヱ門
同　河内屋茂兵衛
同　河内屋和助
同　秋田屋市兵衛
西京　出雲寺文次郎
同　村上勘兵衛
同　勝村治右衛門
同　杉本甚助

東京
同　須原屋茂兵衛
同　山城屋佐兵衛
同　小林新兵衛
同　丸屋善七
同　和泉屋市兵衛
同　須原屋伊八
同　出雲寺萬治郎
同　院屋喜兵衛
同　近江屋平七
同　長門屋龜七
同　三家村佐平

名山閣　東京芝大神宮前書舗
和泉屋吉兵衛發售